

遠隔二者共食会話における菓子を用いた食物品目の違いについての一検討

A study of the differences in meal items using confectionery
in online pair dining communication

学籍番号：201921659

氏名：張何 健鵬

Zhanghe Jianpeng

共に食事をすることは、お互いを結びつける人間の重要な活動の一つである。家族の団らんの場として食事を楽しんだり、懇親会のような多くの人が集まる場で共に食事を行ったりなどの、食事がある場でのコミュニケーションを、人は日常的に行っている。

コロナウィルス感染予防を特段の契機として、人々が同僚や友人とであっても距離をとる必要が出てきている。懇親会のような多数での共食会話が、対面形式からオンライン形式へ変化してきている。しかし、遠隔地間での共食を対面と比較して好ましくは思えない人も多く、より適切な遠隔地間での共食支援などが求められている。ところが、遠隔地間の共食場面においてどのようなコミュニケーションが行われているのかは、あまり知られていない。

本研究では、食物品目が会話に影響するという関連研究を踏まえて、食物品目の違いについての遠隔共食会話への影響を検討するため、菓子を用いで相手と同じ食物品目を摂食した場合と、相手と異なる食物品目を摂食した場合と、食事なしで話した場合を比較した。具体的には、遠隔共食場面の会話行動、食事行動と視線行動についてビデオ観察を行い、質問紙とインタビュー結果を合わせて分析した。

その結果、同食条件での遠隔共食会話と非同食条件での遠隔共食会話では、無食条件の場合、参加者は相手への視線は変わらないが、他のところを見る視線が増加したが、会話行動や食事行動に関して調査した他の指標については大きな差は見られなかった。

なお、本稿の内容の一部は、学会等で公表している。

研究指導教員：井上 智雄

副研究指導教員：森田 ひろみ